

# 地域博物館における民具資料の資源化に向けて

——唐箕の地域的展開を通して——

吉留 徹

## 1 はじめに

平成の市町村合併を契機として、各市町村にある地域博物館<sup>1)</sup>は統合あるいは閉館、人員削減、正規職員から嘱託職員（非正規）への転換、2館を扱う兼務業務や「雑芸員」化等といった事態を招き、館の管理運営についても行政直営から指定管理に移行するという体制そのものも改変されるという状況が生起しているのは周知のとおりであろう。近年では公共施設マネジメントの推進で、先行きが不透明な財政運営のなか行政施設の廃止や統合、指定管理の導入の検討など地域博物館などのハコモノはその対象にあがっている。

また、民具資料を収集、調査研究活動をおこなう地域博物館にあつては、「同じものをいっただれだけ収集するのか?」、「置く場所もないのに何故収集するのか?」、「人が使わなくなって捨てるようなもの（ゴミ）を何故集めるのか?」等々特に民具資料に対する冷ややかな声は行政内部だけでなく外部からも発せられ、建物はもちろんのこと民具資料そのものを廃棄する危険さえあるのも事実である<sup>2)</sup>。

このような状況のなかで、今後どのように民具資料を資源化<sup>3)</sup>していくかは、行政組織のなかにある地域博物館においては大きな課題である。数多く集めることやそこから何を見出していくのか、そのことから地域に何を還元させることが可能なのか。本論では、このような地域博物館である下関市立豊北町歴史民俗資料館（旧豊北町歴史民俗資料館）において、合併後に豊北町以外に収集する機会を得た民具資料も含めて一事例として、地方における民具資料の資源化について考えてみたい。

## 2 民具資料の資源化へ向けて—唐箕の形態的分類と分析—

今回取り上げる民具資料は、筆者が在籍する下関市立豊北町歴史民俗資料館（太翔館）<sup>4)</sup>で、数量的にも多く、また紀年銘（年号のある）が比較的記入されている「唐箕」である。唐箕はいままでもなく米、豆類等の穀物そのものとそれに混じるシイラ、芥、粃殻といった塵を選別する道具である。「唐箕は高価なもので、名主など富裕層の農民にしか持てるものではなかったろう」（佐々木 1981:101）といわれる。近世資料における唐箕使用例は『和漢三才図会』（1713年正徳年間）とされるが、それ以前『会津農書』（1684貞享元年）のなかに「颯扇」（唐箕）が出ており、江戸時代初期にはすでに使用されていたことがわかる（佐々木 1983:10）。なお、山口県においては『明治十四年農談会日誌』に「扇車」（山口県周防国吉敷郡）という名称が確認される<sup>5)</sup>。紀年銘農具のなかでも唐箕に関する調査は、日本常民文化研究所（現：神奈川大学日本常民文化研究所）が昭和54.55年「文化庁民俗資料緊急調査補助事業」として『紀年銘（年号のある民具）に関する調査』を実施し、地

域博物館の協力のもとに全国的に資料集成され、理論化が進められた。

そのなかで、小坂は5つの指標〔脚、樋口、漏斗部分、扇車を支える軸の支持方法、落下量調節装置（方法）〕から、東日本は6脚以上多脚、一番口（手前）が正面、二番口が背面、固定舟型、取手部に短い束の柱、さしこみ式。それに対し、西日本は4脚、樋口が正面、可動型、取手部の柱が天地、はね板・回転式として「東日本型・西日本型」に分類する。（小坂 1980: 125-127）小谷は〔漏斗、調整部、調整方法、口、翼車軸、脚部、落とし口、調整部幅、握手、比例〕10指標にて分類をおこない（小谷 1981:4）、西日本では「大阪の農人橋京屋で作られた、京屋型もしくはそれに類似するものが近畿、中国、四国に集中」し、東日本では「各唐箕にそれぞれ地域的特色があり、分散的な傾向がみられ、商業的な交流および大阪の支配力が強かったため」であろうとしている（小谷 1981:5）。さらに近藤はこれらの分類指標を批判的に再検討し、耐久性、変容が少ない翼車支持方法による新たな形態5分類指標〔①主柱支持型②脚柱支持型③横木支持型④縦木支持型⑤X脚支持型〕を用い（近藤 1991:771）、「形態差」から「製作技術の系譜」、「伝播と流通」状況といった江戸時代および明治時代の唐箕に関して、全国的な分布傾向を明らかにしている。

近藤の分析指標に対し、河野は主軸支持による分類では、地域的分布については京屋系の歴史の変遷が見られなくなっていると指摘、地方の在来系唐箕から改良唐箕への変遷を含めての近代以降の変遷の重要性を説き、小坂や小谷の用いた分類基準の有効性を指摘している（河野 2013: 18）。

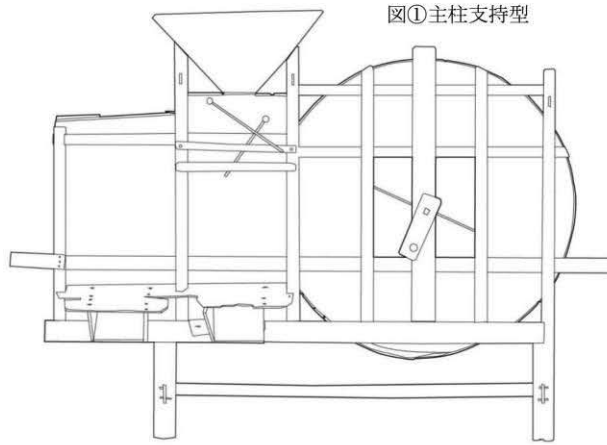
近藤の翼車支持方法による研究から、西日本においては、近畿、中国、四国に集中する標準型として「京屋製唐箕」および「準京屋」「京屋ブランド」（大阪：上方）が席卷し、主柱支持型は中部西部地方から九州地方に展開、京屋、準京屋、熊本式に分類されるとされ（近藤 1991:771）、中国地方の地域的傾向として、山陽側：主柱支持、山陰側：横木支持（二塚系）があり、江戸・明治時代の銘文をもつ縦木支持型はないとされる（近藤 1991: 811）。しかし、中国西部地域には調査が及んでおらず（近藤 1991: 787）、その実態についてはわからないのが実情であろう。そこで、河野がまとめた指標と近藤指標を取り入れながら形態的に分類し、唐箕という一農具（民具）の実態から「モノ」をどのように資源化ができるか考えてみたい。

#### 一事例 豊北町域および周辺の唐箕 豊北歴史民俗資料館所蔵資料より一

資料館所蔵の唐箕資料は【表-1 唐箕一覧】のとおりで、個体数は19点、漏斗部分は欠如するものが多いが、いわゆる在来型（大型）民具〔A型〕7点【図Ⅰ〈図・写真〉在来型唐箕】と近代型（改良小型）民具〔B型〕12点【図Ⅱ〈写真〉近代型唐箕】である。在来型はいずれも4本脚、樋口が前面、漏斗は可動型等西日本型に分類されるが、扇車（翼車）取付部分によるとⅠ類：主柱支持型によるもの4点とⅡ類：縦木支持型によるもの3点に分類できる。近代型BについてはⅠ類：主柱型は確認されず、Ⅱ類：縦木型支持型の山口県熊毛町製作「奈良屋式」（写①）3点、同県光市製作「ヒカリ式」（写③）、それに類似した唐箕（写②）および山口市「防長式」（写④）の計6点、Ⅲ類：脚柱支持型は愛媛県越智郡

图 I (图·写真) 在来型唐箕

主柱背面



图①主柱支持型

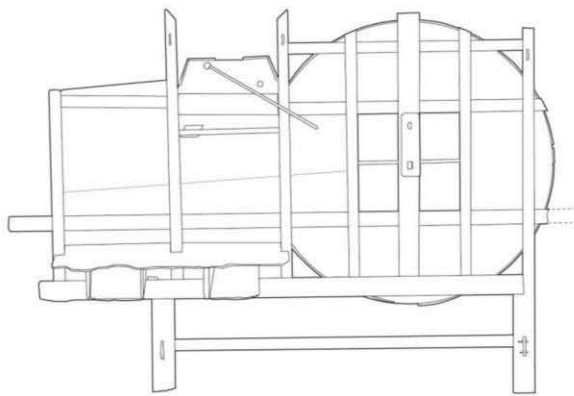
主柱前面



漏斗部分



主柱背面

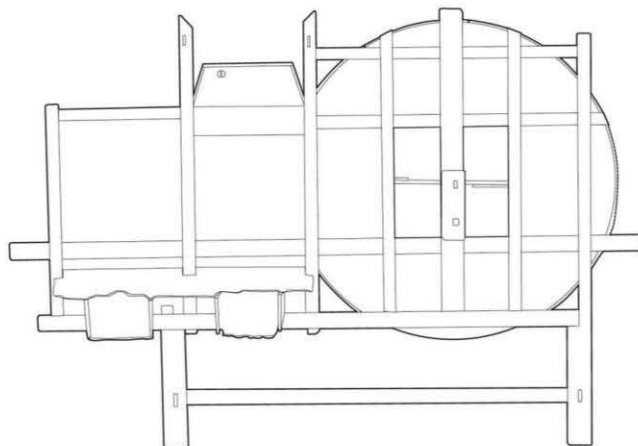


图②主柱支持型

主柱前面



主柱背面



图③主柱支持型

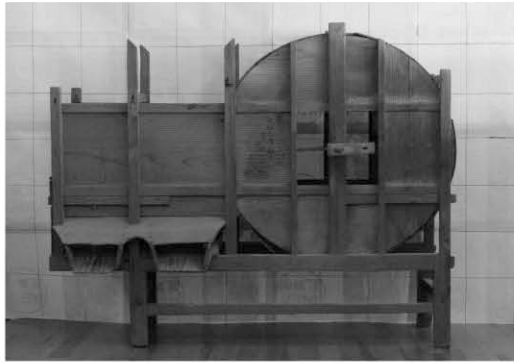
图③主柱支持  
主柱部前面



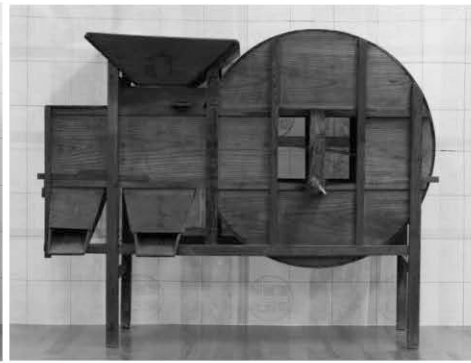
選別部前面



図 I (図・写真) 在来型唐箕

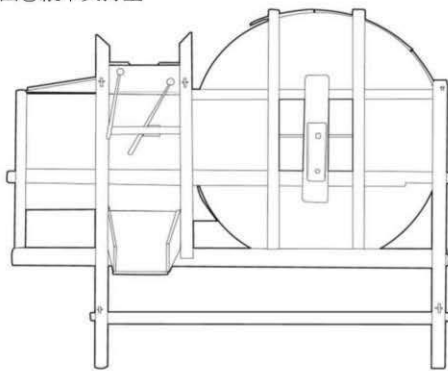


写A: 支柱支持型



写B: 縦木支持型

図④ 縦木支持型

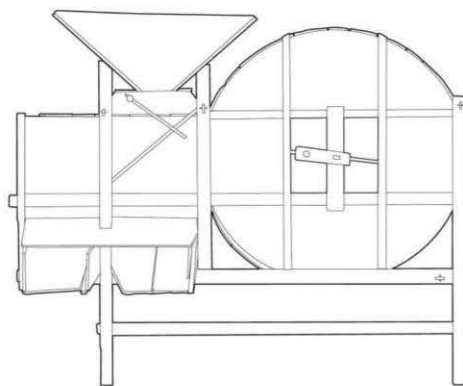


前面縦木部分 背面縦木および左右柱部分

※改良唐箕の印判(神玉村)



図⑤ 縦木支持型



前面漏斗部



小西村安野農具製作所「安野式ウチバ唐箕」3点(写⑤)と同系(写⑥)のもの、さらに漏斗部分が固定される大分県竹田市松本農具製作所「松本式」(写⑦)の計5点、Ⅳ類：横木支持型(写⑧)に分類される。

在来型については支柱支持型：A型 - Ⅰ類は明治24年に豊北町神玉村三澤唐箕製作所にて製作されたと思われるもの(図①)、昭和3年改良したもの(図②)、それを模倣したと思われる豊北町滝部上市の中村製作所(図③)、また明治9年豊浦町殿居で製作された今回一番古いものが確認できた(写A)。三澤唐箕製作所製は風胴部の上貫の上にさらに棧を入れ格子状に生まれ、頑丈堅固な感じを受ける。支柱支持型の代表である京屋系(図Ⅲ参照)に付加したもののように思える。中村製も同形式を踏襲して、当時3円で製造していた。三澤唐箕製作所については「大正から昭和初期にかけて神玉村西沢においてあった三沢好松(万石・唐箕)、三沢浅吉(万石・唐箕)、三沢熊一(唐箕)が製作、昭和18年頃まで三沢京助によって製作され大津郡油谷・日置町農家に出荷していた。」(豊北町1994:1062)とあるように、好松-浅吉-熊一-京助の関係については現時点では不明であるが、豊北町近隣周辺の長門北浦沿岸地域に分布していたと思われる。

A型 - Ⅱ類縦木支持型は旧下関市清末町(図④)、使用地不明〔長府か?〕(図⑤)および山口県宇部市(写B)より採集された資料で、豊北町では使用されていない。清末町阿内の唐箕は、明治16年8月福岡県豊前築上町小山喜平製作を購入したものを、昭和14年4月神玉村三澤京助の三澤製作所にて扇(翼)車部分に取付・修繕(ベアリングの取付)されたものであることが紀年銘より判明する。なお、『豊北町史二』の唐箕写真(豊北町1994:1063)には「無類大極請負唐箕三澤熊式製」「明治廿九年旧九月四日製第二百拾六号」の縦木支持型のもものが認められる。恐らく三澤熊一によるものと思われるが、資料館には現存していない。扇(翼)車支持部が支柱から縦木へと変化したのか、他の「三澤」を名乗る製作所で差異化をはかったのか。あるいは上記のように修繕や改良の際に変更されたのか判明しないが、豊北地域にはこれら2系統の唐箕があったことが確認されよう。

B型 - Ⅱ類縦木支持型はいずれも山口県周防部地域(山陽側)にて製作されたもので、特に熊毛町の「奈良屋式」(写①)は昭和40年豊北町阿川農業協同組合(昭和41年豊北町農業協同組合に合併)を通し入手され、豊北地域に昭和50年頃まであったといわれ、豊北町に普及したものという<sup>6)</sup>。「ヒカリ式」は昭和20年以前、滝部の農機具屋を介し豊北町角島で使用したものという<sup>7)</sup>。および同系の不明唐箕はいずれも似た形式である(Ⅱ類a)。同じ縦木型であるが「防長式」は風胴の上に台を付けるための柱があり、漏斗と風胴が接し、把手部分が低い(Ⅱ類b)という別の型式を有している。

B型 - Ⅲ類「安野式ウチバ唐箕」(写⑤)は昭和24年の紀銘があり、下関市垢田、豊浦町および豊北町で使用とされるが、豊北町では扱っていなかった<sup>8)</sup>ともいわれる。また、かつて四国のハンドウ船(陶磁器類の輸送船)が往来していたといわれる、豊北町栗野浦では「ウチバ唐箕」に非常に類似した唐箕(写真②)が採集されており、恐らく戦後少しの間だけ栗野にあった藤井製作所<sup>9)</sup>が模倣して製作したのではないかと思われる。いずれに



図II(写真)近代型唐箕



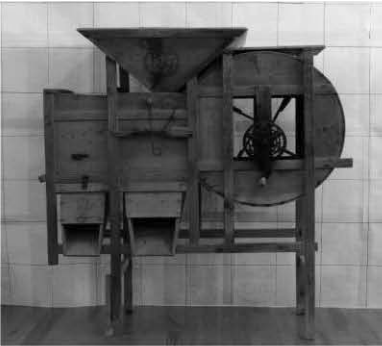
写真①:奈良屋式唐箕(縦木支持)



写真②:不明唐箕(縦木支持)



写真③:ヒカリ式唐箕(縦木支持)



写真④:防長式唐箕(縦木支持)



写真⑤:安野式ウチバ唐箕(脚柱支持)



写真⑥:ウチバ系唐箕(脚柱支持)



写真⑦:松本式唐箕(脚柱支持)



写真⑧:不明(横木支持)



※奈良屋式唐箕ラベルの変遷



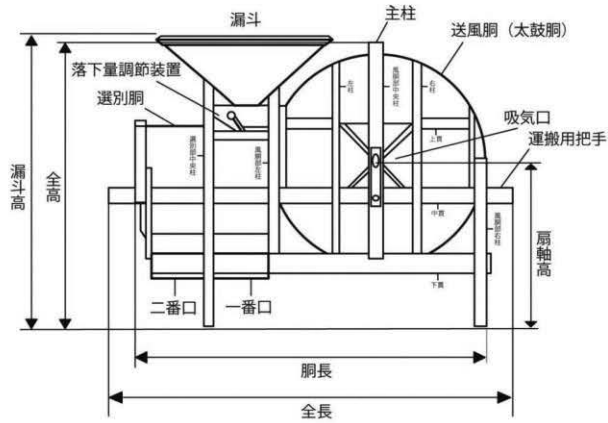
※ヒカリ号ラベル



※安野式ウチバ唐箕の使用法



※松本式ラベルと解説



図III  
京屋系といわれる唐箕略図

河野通明氏  
「四国の民具を計測比較しようー馬鋤・犁・農耕鞍・唐箕・万石通しの計測ポイントー」  
『民具集積』四国民具研究会16号(2014)  
を基に一部改変して使用

〔京屋系唐箕略図(部分名称)および計測部〕

図IV:唐箕分布図



せよ、豊北町内で普及したかどうかは判然としない。ただ、これらの分布（図Ⅳ：唐箕分布図）をみると響灘沿岸地域に分布していることがわかる。「松本式」は同じ脚柱だが、吸気口、漏斗が固定等明らかに構造が「安野式」とことなり、別系統のものと思われる。

現時点の少ない資料からの判断でまだ十分な調査も進んでいないが、豊北地域の唐箕について以下のことが指摘できよう。

1) 大型唐箕は全体的には「西日本型」であるが、形態的には次の2つに分類される。

I類：支柱支持は、豊北町および豊田町で確認される。京屋系であるが、豊北町のものには風胴部を格子状に囲むところに特徴が見出され、この地域にある製作者（所）の意匠による地域的特徴を示すものと考えられる。

II類：全体的には「西日本型」であるが、「東日本型」といわれる縦木支持が旧下関市域、山陽地域で確認される。

2) 戦前まで豊北町神玉村に「三澤唐箕製作所」があり、一つの唐箕製作地であった。

3) 改良唐箕については、I類：支柱型は確認されず、II類：縦木支持型「奈良屋式」、「ヒカリ式」等は同系でII類aと「防長式」II類bに分類ができる。III類：脚柱支持型にはなるが、「安野式」と漏斗固定型「松本式」は別系統と考えられる。IV類：横木支持型が確認される。なお、豊北地域では「奈良屋式」が多く流入しているが、山陽地域に分布する縦木支持型の在来唐箕との関連も窺わせるが、今後の課題である。

4) 唐箕の流通については、「在来唐箕」は豊北町で製作されたものが近隣周辺の長門北浦沿岸地域に分布していくと思われるが、他のものについては不明。「改良唐箕」は戦後の農業会から各村農業協同組合、さらには昭和の市町村合併に伴う町農業組合への統合と戦後の農業技術の普及制度とも関わるが、豊北町地域では農協や個人経営の農業機具販売会社を仲介して戦後から改良唐箕が出始めると、次第に場所をとる大型唐箕から転化するというが<sup>10)</sup>、具体的な流通経路については、交通網の発達や商圈の拡大とともにどのように展開するか、技術者の系譜や移動も含め、今後の課題として残る。

このように形態分類の分析からは、「モノ」と「人」の交流がおぼろげながら見えてくる。合併を機に地域も広くなり、情報も増えてくるなかで、これら交流が生まれる地域も含めた新しい地域設定のなかで、地域博物館の新しい役割が必要となっていく。

### 3 今後の課題

地域に継承された民具資料の集積と形態的類型化による比較という民具学的手法は、その地域の特徴を見出す手法として、一地域博物館所蔵資料からでも可能であり、地域の歴史の変遷の手がかりとなる。しかし、それを資源化するためには、「これらの技術背景にある暮らしをまとめた技術文化」（坪郷 2010:211）というようにその背景を含めた資料収集・整理分析が必要となる。しかし、地域博物館には、まだ死蔵化している多くの資料群がある。これらの資料群から情報の抽出、共有化ができるシステムを構築し、さらには閲覧できるような資料提供をおこなうことが望まれる。そして、多くの研究者の目を通し、新し



い視点や視角での再調査は今後とも必要であろう。近年では四国民具研究会を中心とした紀年銘民具調査の蓄積<sup>11)</sup>や氷見市立博物館による農具資料の集成調査分析<sup>12)</sup>は現在の民具研究の基礎データの見直しと、技術革新が進む明治以降の近代化への対応、あるいは第二次大戦後から高度経済成長期に「モノ」と人がどのように関わっていくのか、「モノ」に対する人の価値観の変化そのものを考える上でも、非常に重要な取組がおこなわれている。

資料の資源化のためには、まずは収蔵あるいは所蔵資料のデータ化そのものが喫緊な課題である。そのためにも地域博物館において民具をみる学芸員をはじめ、資料整理を実施する人的支援は不可欠な存在である。例えば山口県では「みんぞくの会」(会長：坪郷英彦)等が中心となり、県内各大学、博物館と連携をはかりながら、県下の資料整理を実施することが考えられよう。また、資料に関する情報は SNS などを利用しながら、地域内外から様々な情報を入手することができるようなシステムが望まれる<sup>13)</sup>。博物館においては、形態的分類からさらに実際の民具(農具：唐箕)を使用し、機能そのものの比較検討をおこなうために、学校、地域住民等一般市民の参画のもと体験学習の一環として実施するなど、資料に対する情報を補完していく必要がある。これらのことは、すでに実践されている博物館も多くあろう。しかし、例えば昔の道具を使った体験学習に、経験した人を講師として招き、実施しているところも多かろうが、いずれそのような人材がいなくなってしまった場合には、学芸員自らがその技術を継承し、実践していかなければならない時代(すでに実施される所も多いだろう)が来ている。民具資料が地域の文化資源となるためには、民具資料という「モノ」だけでなく、それをどう使いこなすか、その背景にある技術文化を伝えてはじめて民具資料の資源化にも繋がることにもなろう。その意味では、地域博物館そのものが、「伝承の場」であり、民具資料を使って実践できるような「専門職」としての学芸員の確保、およびその育成こそが、地域資源化の重要な核となろう。

## 追記 謝辞

坪郷先生長い間ご苦勞さまでした。先生にお会いしてから民具に少しずつ興味を抱くようになりました。まだまだ基礎もわからず、資料整理もおぼつかない状況ですが、今回このような機会を与えていただきありがとうございます。今後ともご指導ご鞭撻いただきますようお願い申し上げます。

## [注]

1) ここでいう地域博物館は、「博物館法」(昭和 26 年法律第 285 号)第 18 条に基づき教育委員会が所管する登録博物館をはじめ、相当施設および類似施設といわれるような「博物館法」でなく「地方教育行政

の組織及び運営に関する法律」(昭和 31 年法律第 162 号) 第 30 条によって規定された郷土資料館といわれる地域の歴史文化や地域の偉人を顕彰するような、地域に密着した博物館および資料館を指す。特に本論ではいわゆる市町村立の歴史民俗系博物館、資料館を指す。

2) 例えば唐箕のような大型民具であれば、展示や保管場所の問題から多少形が異なる唐箕は必要なく、1つの唐箕があればそれで済むとの考えから、処分された例を聞いたことがある。

3) ここでいう「資源化」は、「埋もれた膨大な文化資料体のなかから、発掘され、価値づけられ、活用されてはじめて資源になる」(山下晋司「文化という資源」内堀基光編『資源と人間』資源人類学 1 (2007) 弘文堂) の定義に準じる。

4) 下関市立豊北歴史民俗資料館(通称:太翔館)は、山口県西部に位置する豊北町にある資料館である。平成 17 年下関、菊川町、豊浦町、豊北町の 1 市 4 町による市町村合併に伴い、名称を変更する。旧豊北町時代、昭和 55 年旧滝部小学校(山口県指定有形民俗文化財)を郷土資料館として活用するため、地域住民の手によって歴史、民俗、教育、芸術文化等々様々な分野の資料が収集される。平成 19 年より建物は文化財保存修理工事を実施し、館内にあった民具資料は空校舎へ移動、文書資料や教育資料等の地域の歴史民俗文化を市民参画のもとに企画展示し、文化財を活用した、郷土資料を学ぶ学習施設として平成 23 年リニューアル開館した。

5) 農業発達史調査会編『日本農業発達史』第 1 巻(昭和 28 年発行)所収 農務局「農談會日誌」

6) ~10) は現在滝部で農機器類を取り扱っている豊関農機販売株式会社(旧西村農機株式会社:昭和 5 年創業)会長西村修氏[昭和 5 年生]のご教示による。滝部地域には鍛冶屋などがあって唐箕を作っていたというが、唐箕を扱っていたのは自分のところか農協であったという。「奈良屋式」は昭和 55 年まで、山口県で最後まであった農具製作所であったという。「ヒカリ式」や「ウチバ式」は取り扱った記憶はないという。氏によれば、先進地の唐箕などの情報はヤンマーなど農機具メーカー(エンジン)の営業で各地を回る人が各地の農機具販売店(ヤンマーの販売代理店)などに提供していたという。

11) 織野英史や磯本宏紀による唐箕研究等。詳細は四国民具研究会発行の『民具集積』を参照されたい。

12) 氷見市立博物館編特別展解説図録『氷見の昔の道具たち』—民具からみる地域のくらし—2016 等

13) 公立博物館では個人情報保護法をはじめ情報セキュリティが厳しいため、実現するには難しいのが現状であるかもしれない。

## [参考文献]

河野通明 2014,「四国の民具を計測比較しよう—馬鍬・犁・農耕鞍・唐箕・万石通しの計測ポイント—」『民具集積』四国民具研究会 16 号

小坂広志 1980,「紀年銘を有する唐箕について—東日本を中心に—」『紀年銘(年号のある)民具・農具調査—東日本—』日本常民文化研究所調査報告第六集 神奈川大学常民文化研究所編(復刻版 1993 平凡社)

小谷方明 1981,「西日本の唐箕の特色」『紀年銘(年号のある)民具・農具調査—西日本—』日本常民文化研究所調査報告第八集 神奈川大学常民文化研究所編(復刻版 1993 平凡社)

- 近藤雅樹 1991, 「紀年銘唐箕の形態分類『国立民族学博物館研究報告』16-4
- 佐々木長生 1981, 「会津地方における近世農具—絵画・文献資料を中心に—」『紀年銘（年号のある）民具・農具調査—西日本—』日本常民文化研究所調査報告第八集 神奈川大学常民文化研究所編（復刻版 1993 平凡社）
- . 1983, 「『会津農書』の農具をめぐって (一)-近世農具の発展過程-」『民具マンスリー』16-5,
- 坪郷英彦 2010, 「暮らしの形」『山口県史 民俗編』山口県
- 豊北町 1994, 豊北町編纂委員会編『豊北町史二』豊北町教育委員会

表一 下関市立豊北歴史民俗資料館所蔵唐箕一覽表

NO.	在来/近代	探査場所 (使用地) 【】は現在住所	製作地	製造者/型式	製作年等	脚敬	全長/脚長 (cm)	全蓋 (漏斗高) (cm)	奥行/風脚幅 (cm)	風脚半径 (cm)	胴軸高 (cm) / 枚数	基礎支持	漏斗 (cm) (左右×奥行×深)	落下調整部 樋口配置	備考	記年銘他	図/ 写真
1	在来 (大型唐箕)	豊北町 【】は現在住所	豊北町 神玉村	三澤○ (大工矢玉村中村利吉)	明治24年 旧4月20日	4 182/157	130.5	37.2/31.1	46 72.4/4	51×55.5×24	主柱	ハネ板 (回転式) 取外可能	前列	8日×18枚であれは製 作費は1円44銭 (=当時の1円は現在 の約2,100円上すれば、 3,024円程度)	〔前〕 三澤○(前面唐箕) 明治廿四年四月拾日 八人共ニ之ヲ日十八日 大工矢玉村 中村利吉 〔漏斗左面唐箕〕 〔漏斗右面唐箕〕 〔漏斗前面唐箕〕	図①	
2	在来 (大型唐箕)	豊北町 大字神玉村根崎 【】は現在住所	豊北町 神玉村	三澤唐箕製造所	昭和3年改	4 180/154	118.5(風脚部)	37.2/31	44.5 71.5/4	漏斗穴	主柱	ハネ板 (回転式) 取外可能	前列		〔三澤唐箕製作所改之〕 (主柱部前面唐箕) (昭和参年改之) (主柱部背面唐箕)	図②	
3	在来 (大型唐箕)	豊北町能中 【】は現在住所	豊北町 瀧部村	中村製作所	昭和10年 10月10日	4 174/154	107.8	37.8/31	34 73.6/4	漏斗穴	主柱	ハネ板 (回転式) 取外可能	前列	No.1の中村利吉との間 係は不明、中村製作所 といふ鑑定によるもの か?	〔前〕 三澤唐箕製作所改之 (主柱部前面唐箕) (昭和参年改之) (主柱部背面唐箕)	図③	
4	在来 (大型唐箕)	下関市豊北町?	豊田町 蔵屋	工人和田■助蔵	明治9年	4 152.9/151.3	125.6	42.2/35.2	44.8 77/4 (3枚穴)	漏斗穴 (77.6×46.1×28)	主柱	破損不明	前列		〔豊浦郡蔵屋村住 明治九年秋 工人○○助蔵 蔵屋 所有〕 河田唐	写A	
5	在来 (大型唐箕)	下関市清来町河内 【】は現在住所	豊前国 築城郡 本庄邑 山口県 豊浦郡 神玉村	小山喜平 三澤京助	明治16年 8月 昭和14年 4月改	4 143/139	118.40/33	41.76/5/4	41 76.5/4	縦木	縦木	ハネ板 (回転式) 取外可能	前列	明治16年福岡県豊前 市築上町より購入したもの を昭和14年に神玉村 にて修理(取替、釘の 追加)をしたものと考え られる	〔大堰上 請合唐箕細工所 福岡縣豊前 國築城郡本庄邑 小山喜平作之〕 〔風脚部左柱前唐箕〕 〔明治十六年改之〕 〔物〕 〔風脚部背面中央柱唐箕〕 〔山口縣長門國豊浦郡河内村小川〕 〔風脚部背面中央柱唐箕〕 〔山口縣豊浦郡神玉村〕 〔昭和拾四年四月改之〕 〔中央柱本節唐箕〕 〔山口県豊浦郡神玉村 ■三澤京助〕	図④	
6	在来 (大型唐箕)	下関市長俣(長俣?)	-	-	明治30年 11月	4 153/146.5	125	45.3/38.2	43.7 76.5/4	縦木	縦木	ハネ板 (回転式) 取外可能	前列	長俣博物館より受入	〔明治参拾年拾月新調〕(風脚部表に 唐箕)	図⑤	
7	在来 (大型唐箕)	宇部市 【】は現在住所	宮市船本	田中重清左衛門		4 163.2/160.5	127.8	47/39.1	49.2 81.7/4 (1枚穴)	縦木	縦木	ハネ板 (義込式) 取外可能	前列	宇部市立厚薄小学校より 受入、下関市蔵で使 用されたものではない	〔大堰上宮市船本田中重 清左衛門〕 〔風脚部左柱前唐箕〕	写B	
8	近代 (改大唐箕)	豊北町大野河川 【】は現在住所	山口県 毛町三丘	奈良唐箕製作所	昭和40年	4 99.6/95.9	122.3	43.6/36.5	27.5 78.3/4	縦木	縦木	ハネ板 (御念心 調整可能 な設計が ある) 取外可能	前面 向背 (前面可動)	鼎勝を通して入手	〔A級オー位入選 最新優秀(風脚部前 面右柱孔版印刷) 山口県熊毛町三丘 (風脚部前面左柱孔版印刷) 奈良唐箕製作所 (風脚部前面左柱孔版印刷) (昭和40年米之 河川上市 中村 勉 フペル) 山口縣長門國豊浦郡神玉村 厚薄唐箕 ■生号唐箕 奈良唐式更生号唐箕 山口縣長門國豊浦郡河内村 鼎勝製作所 工藤 三丘 伝由布 (風脚部前面)	写①	



9)	近代 (改良唐葺)	豊北町大字田井 【下関市豊北町】	山口県熊毛町三丘	奈良唐葺製作所		4 112/108	104.6 44/36.6	29.5 77.4/4	縦木	漏斗 欠	ハネ板 (留金式) 取外可能	前面 向背 (向面可能)	農協を通して入手	【A】緒子一位入選 最新優秀 (鳳脚部前面右柱孔版印刷) 山口県熊毛町三丘 (山口県熊毛町三丘) 奈良唐葺製作所 (奈良唐葺製作所) 選別部前面左柱孔版印刷)	写②
10)	近代 (改良唐葺)	下関市伊倉本町	山口県熊毛町三丘	奈良唐葺製作所		4 109.5/107.7	124.5 43.2/36.5	29 77.5/4	縦木	58×54×24.3	ハネ板 (留金式) 取外可能	前面 向背 (向面可能)	農協を通して入手	【A】緒子一位入選 最新優秀 (鳳脚部前面右柱孔版印刷) 山口県熊毛町三丘 (山口県熊毛町三丘) 奈良唐葺製作所 (奈良唐葺製作所) 選別部前面左柱孔版印刷) 【B】 山口県熊毛町三丘 (山口県熊毛町三丘) 奈良唐葺製作所 (奈良唐葺製作所) 選別部前面左柱孔版印刷) 山口県熊毛町三丘 (山口県熊毛町三丘) 奈良唐葺製作所 (奈良唐葺製作所) 選別部前面左柱孔版印刷)	写③
11)	近代 (改良唐葺)	下関市豊北町?	一			4 109.9/108.4	44/36.6	30.3 77.5/4	縦木	54.2×66.5×25.1	ハネ板 (留金式) 取外可能				写④
12)	近代 (改良唐葺)	豊北町大字角島	山口県光市上島田	大田農具製作所 大田式唐葺	昭和20年以前	4 97.2/96.4	43.7/36.6	25.3 77.5/4	縦木	57.5×57.5×23.2	ハネ板 (留金式) 取外可能	前面 向背 (向面可能)	昭和20年以前に瀬部 (豊北町)の農機具屋が 販売してきた。当時 8日程度で購入 全国農具共通金庫高 小規の元祖 比較審査最高第一位入選	大田農具製作所 (鳳脚部前面右柱孔版印刷) 光市上島田 (鳳脚部前面左柱孔版印刷) 【A】 大田農具製作所 (鳳脚部前面右柱孔版印刷) 山口市小郡防長農機有限公司 (鳳脚部前面左柱孔版印刷)	写⑤
13)	近代 (改良唐葺)	下関市豊北町?	山口市	小郡防長農機有限公司 防長号		4 118.8/113.5	42/36.5	30 76.5/4	縦木	61.5×55.5×25	ハネ板 (留金式) 取外可能	一番口前面 (固定) 二番口前面 (向面可能)	台付	【防長号規格製 (鳳脚部前面右柱部孔版印刷) 山口市小郡防長農機有限公司 (鳳脚部前面左柱部孔版印刷)	写⑥
14)	近代 (改良唐葺)	下関市埴田町	愛媛縣越智郡小西村	安野農具製作所 安野式ウチノ唐葺		4 96.6/95.5	43.2/36.5	32.5 81/4	脚柱	75×45.3×29	ハネ板 (スライド式)	一番口前面 (固定) 二番口前面 (向面可能)		安野農具製作所製造 (前面鳳脚部脚柱孔版印刷) 安野式ウチノ唐葺 (前面選別部左柱孔版印刷)	写⑦
15)	近代 (改良唐葺)	豊浦町蒲田 【下関市豊浦町】	愛媛縣越智郡小西村	安野農具製作所 安野式ウチノ唐葺	昭和24年	4 96.9/95.8	43.4/36.4	32.5 80.5/4	脚柱	77×46.5×27.5	ハネ板 (スライド式)	一番口前面 (固定) 二番口前面 (向面可能)		安野農具製作所製造 (前面鳳脚部脚柱孔版印刷) 安野式ウチノ唐葺 (前面選別部左柱孔版印刷)	写⑧
16)	近代 (改良唐葺)	豊北町?	愛媛縣越智郡小西村	安野農具製作所 安野式ウチノ唐葺		93.7/95.3	43.2/36.4	44.8 80.5/4	脚柱	77.6×46.1×28	ハネ板 (スライド式)	一番口前面 (固定) 二番口前面 (向面可能)		安野農具製作所製造 (前面鳳脚部脚柱孔版印刷) 安野式ウチノ唐葺 (前面選別部左柱孔版印刷)	写⑨
17)	近代 (改良唐葺)	豊北町大字栗野 豊野浦 【下関市栗野町】	豊北町栗野?	藤井製作所?		4 99.4/96.8	43.2/36.6	39 78/4	脚柱	72.6×44.5×28	ハネ板 (スライド式)	前面 (固定)	安野式ウチノ唐葺を模倣して製作したものか 形状類似	栗野浦 重中本家 (マシツク書)	写⑩
18)	近代 (改良唐葺)	豊北町大字肥中	大分県竹田市	松本農具製作所 松本式		4 98/96.3	43.1/36.5	29 70/4	脚柱	60.7×41×20.5	ハネ板 (留金式) 固定	前面 前後差替 (向面可能)		松本式 大分県竹田市 松本農具製作所	写⑪
19)	近代 (改良唐葺)	下関市福江				4 113.3/106.2	42.3/36.5	29.5 72.8/4	縦木	63×45×29	ハネ板 (留金式) 固定	前面 (固定)	台付		写⑫

(注) 一覽表作成にあたっては、河野通明「四国の民具を計測比較しようー鳥糞・糞・糞糞・唐葺・万石通しの計測ポイントー」「民具集録」四国民具研究会16号(2014)を参考に作成することができた。大変参考にでき、記して感謝したい。  
なお、本論他図表作成にあたり、土井ヶ浜運動人類学ミュージアム、近藤なつき(計測)、岡部寛子(トレース)、矢田智美・村田恵理(以上京屋系唐葺図)、高橋浩史(地図) 各氏の協力を得た。記して感謝申し上げる。

所属：土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム（下関市立豊北歴史民俗資料館長）

E-mail アドレス：yoshidome.toru@city.shimonoseki.yamaguchi.jp